

「ノア物語の始まり」

2020年11月06日

主は、地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くを見て、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。主は言われた。「私は、創造した人を地の面から消し去る。人をはじめとして、家畜、這いもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ。」だが、ノアは主の目に適う者であった。(創世記6章5節～8節)

6章から、ノア物語が始まる。ここは「J典」と「P典」の資料が混在し、記述に矛盾があるが、気にしないでいい。地上に人が増えはじめ、娘たちが生まれた。神の子らは娘たちが美しいを見て、自分が選んだ者を妻とし、子を産んだ。子らはネフィリムという勇士で、名の知れた男たちであった。この話は、ネフィリム発生の原因譚とも読める。神の子らとは天使であろうか。天使と人間の娘が結婚をし、子どもを得たということになる。異教では、天使と人間が結婚する話は多々あるが、聖書では、神の世界と人間は隔絶し、同等に結び合うことはない。主イエスは人が復活した時、天使のようになり、めとることも嫁ぐこともない(マタイ22:30)と語っている。天使と人間の娘の結婚は聖書的にはあり得ない。神の子らとはイスラエルの王たちを指しているのではないか。彼らは美しい娘を何人も側室にしている。いずれにしても、地上に罪と悪がはびこってきたということであろう。神は「私の霊が人の内に永遠にとどまることはない。人もまた肉にすぎない。その生涯は百二十年であろう」と言われた。ノア以前は、900年前後の寿命であったが、ノアの時代以降は120年と寿命が短縮された。現実には即した寿命になっている。

「主は、地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くを見て、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。主は言われた。『私は、創造した人を地の面から消し去る。人をはじめとして、家畜、這うもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ。』」神は、人間が罪と悪に走る姿を見て、創造したことを悔い、心を痛められた。神は天上から地上を見下ろし、冷徹に凝視する方だと認識しがちだが、聖書の神は、後悔し、心を痛める、極めて人間的な心情を持っておられる。人間の有様を見、また、対話して、心を変えられる人格的な神である。この神のかたちには人は創造されたから、神と心を交わし、会話できるのである。神が見た人間の悪とは、どのようなものであろうか。聖書には記されていないが、蛇がエバに、「神のように善悪を知る者となる」と誘ったように、神のように振る舞うことではないか。神の似姿として人間に与えられたものは、人格的に対話し、右に行くか、左に行くかの自由であった。その自由を自分の思いにまかせ、神であるかのように得意になり、振る舞う。思い上がり、他者を貶める罪と悪に陥ったのである。神は、人間創造を悔い、全てのを消し去る決心をされた。

紀元前3000年頃に書かれた『ギルガメッシュ叙事詩』にも、洪水による世界絶滅物語がある。聖書は、これから借りて、援用していると思われる。ただ、聖書の記述は、神が天地万物を創造し、神の人間への愛と慈しみを描き出している。そして、神の正義に基づいて裁き、洪水によって絶滅させたと、神主導が貫かれている。

神が地上の全てを消し去ることを決意されたが、ノアは主の目に適う者であった。ノアは正しく、全き人で、神と共に歩んだ。彼には、セム、ハム、ヤフェトの三人の息子が与えられていた。ノア夫婦と三人の息子たち夫婦の家族8人が、神の裁きの大洪水から、救われ、次の時代を背負う役目を果たしていくのである。